

受験番号

11

中

国語 その一 (六枚のうち)

次の文章を読んであとの質問に答えなさい。

※この文章は、なだいなだ『わが輩は犬のごときものである』の一節です。文中「ぼく」は、動物達に対する人間の「はなもちならぬ優越感」をすてて、自分自身を「犬のごときもの」として書いています。

この地上に存在するもろもろの動物の中で、笑うことができるのは、自分ら人間だけだなんて、つまりぬ自慢をするのはよそう。およそ、これほど、おろかですからぬことはない。動物相手に自慢したって、なんてことはない。動物が、それゆえ、ぼくらを尊敬してくれるわけではあるまい。

ともかく、ぼくら現代の人間は、つまらんことをいばりすぎる。それというのも、進歩なんて考えを、ぼくらのたわいない脳の中に忍びこませた連中がいけないのだ。進歩だなんて考えが、人間に、古いものを馬鹿にさせた。最近の若い連中は、なにかというと、年上を、

「ふるーい。おくらてるう」

などといっては馬鹿にしおる。実は、ぼくとて、若い時には、そんなことを口走ったことがないわけではないのだが、自分が「ふるーい」といわれるようになって、断然悟った。人間は進歩ばかりしているのではない。確実に退歩もしているのだ。

現代の大学生に、漢字で「わらう」と、幾通り書けるか、テストしてみるがいい。*当用漢字さえ充分におぼえておらぬ大部分の連中は、「笑う」ぐらいしか書けぬだろう。「嗤う」と書けるものは、かなり立派な方だ。「嗤う」は、もっぱら、あざけりわらう時に用いるのである。漢字を見ればわかることだが、「ふるーい」中国人、「おくらてるーる」中国人は、人間の笑いを、想像を越えるほどくわしく観察し、分類し、表現しようとしていた。

そもそも、いにしえの中国人にとっては、「笑う」などと書くのは、誤字・あて字のたぐいだったのである。正しくは「咲う」と書いた。中国人は、人間が口で笑うことを見ていたから、口ヘンなしのわらいを示す漢字を作るはずがなかった。笑は咲と音がにているので、無学なものが、あて字として使いはじめ、それが現代に伝わってしまったのである。咲は、口にかっこうをつけ、しなをつくる、ことを意味している。その他、中国人は、哈・咲・晒・嗤・噓などの字で、さまざまわらいを書きわけていた。数千年前の中国人、進歩論者の目に、ぼくらより、ずっとずっと古い、いいかえれば、現代人よりテイキユウなサルに近いと見える人間が、そうだったのである。おどろくではないか。人間が進歩したなんて大うそだ。たとえば「噓い」などと書かれても、今どきの大学生はおるか、文部省の役人、いや今の文部大臣だって、それがどういう種類のわらいであるか、説明できまい。実は、ぼくだって、わからなかった。ま、ぼくがわからなくなつて、大して意外と思うものもあるまい。しかし、今は調べたてなので、ちゃんと知っている。「噓う」というのは、のどの奥まで見せるような、大口あけてのわらいのことなのである。

赤塚不二夫あたりが流行させたのではないかと思うが、しばらく前から、漫画家のあいだで、わらった口の奥に、のどちんこまでえがくのが流行しているが(しかも、どういうわけか、そののどちんこが、ご

11	受験番号
中	

国語 その二（六枚のうち）

ていねいに二つに割れたりしているものさえある、あれこそ「噓う」と書くのがふさわしいのである。

その他、笑の字のつく熟語をひろいだしたらゴマンとある……といたいところだが、それはちよつと誇張にしても、五十を越すくらいはあるだろう。なかには「笑中刀」なんていう、おそろしくすごみのある熟語も含まれている。表面にこやか、内心に白刃のごとき冷たい悪意をひめている人間の態度を表現するために、彼らはそういう熟語を使ったのである。これでも、現代人の方が退歩しているとはいえぬだろうか。ともかく、現代人であるぼくらは、おごりたかぶるのはやめにして、もう少し謙虚にならねばならぬ。

なんだか、脱線しかけたようだ。完全に軌道からとびだす前に軌道シユウセイしよう。

さて「笑い」と対照的なのが「なき」だ。この「なき」も、ぼくら犬のごときものだけが、特別にそなえた能力と考えるものが多い。とはいえ、どちらかといえば「なき」は「笑い」よりも下等と見られるところもあるせいだ、動物は笑わないと信じて疑わないものも、たまには動物もなくことがありうると、譲歩する。ともかく、動物も涙を流して悲しんでなくかどうか、笑いについて大騒ぎの議論をするほどには、ぼくらは議論しないのだ。

しかし「笑い」と「なき」を、本質的に対立するものとする固定観念が、どれだけそれら二つの行動の理解を深める邪魔をしてきたであろうか。残念ながら、そこまで考えてくれる人は、諸君の中にも、少ないのではないか、と思う。ぼくたちは、二つの対象物がある時、とかくその「ちがい」を見ようとして「似かより」を見すごす。また、似たところをさがそうとすれば、ちがいを見落とすといったぐあいだ。どうしても、そうなりがちなのである。ぼくたちが対照させるから、二つの物が対照的になるということ、忘れてはならないのだ。

「笑い」と「なき」は、似たところをさがそうと思ってみると、非常に似ている。ひとつ、似ているところを数えあげてみよう。たとえば、両方とも、テンケイテキなもの、リズムカルな呼吸運動を基本にしているところだ。リズムの緩急のちがいはあるが、リズムカルであるという点は共通している。両方とも、顔をしわくちやにする表情運動であるところも似ている。あまり似ているものだから、人によつては、表情を見ているだけでは、笑っているのか、泣いているのか、区別がつかないことさえある。ことに、しわだらけの婆さんには、とまどわされる。なき声と笑い声の区別のつかない人もままある。ハッハッハッといいながらに会っている人に会って、びっくりしたことがあった。涙はなきに特徴的だということになっているが、諸君だって経験がおりだろうが、笑いと涙は出る。笑いも、まわりの人間をひきこんで攻撃性をおさえる働きを持つが、なきも同様に、まわりの人間に同情を呼びおこし、攻撃性をおさえさせる。こうやって、似たところを見れば、ぼくたちは、これまで二つを対照させてきたことを忘れ、笑いとなきは、同じところに根を持ち、分化してきたものであることを知るのだ。

さて、ここでもまた、ぼくがむかしむかしの、そのむかしの中国人に敬意を表するのを許してもらいたい。これは、間接的には、現代の若い連中を軽蔑することになるのだが、今の若い連中は、ここまで説明

11	受験番号
中	

国語 その三（六枚のうち）

しないと、ぴーんと来ないのだから困る。どういうわけか、今日は若いものにいやみつたらしいことをいう。四十〇歳の誕生日をむかえたためであろうか。だが、そんなことはどうでもいい。先に進もう。

かの有名な『水滸伝』の中になき方の解説がある。それによると、

「涙も出れば声も出るのを哭といひ、涙は出るが声は出さぬのを泣といひ、涙は出さずして、声だけ出してなくのを号という」

ことになっている。まったくカンケツきわまりない、合理的分析的な分類である。見方によれば、もう当時の中国人には、こういう解説が必要になっていたのであるから、それより昔の中国人にくらべると、彼らはすでかなりの退歩をしていたということになる。彼らですらしかり、それから何世紀も新しい、つまり退歩した人間だから、そんなことはつゆ知らず、ぼくは文章の中で、やたらと一人の人間に号泣させてきた。ああ、こんな無理難題をおしつけられた主人公たちが、今になってみると気の毒だ。号は涙を出さずに声だけ出してなくことだし、泣はその反対に声は出さず、涙だけ出してなくことなのだから、一人の人間に、同時に号泣しろといったってできっこない。彼らの困惑が目に浮かぶ。号泣という言葉は、複数の人間がさまざまなやり方でないで、つまり、あるものが号のなき方でなき、他が泣のなき方でないている場合にのみ使うべきなのである。しかし、一人の人間に号泣させたのは、ぼくだけではない。他のものかきも、けっこうあちこちでやり、主人公たちを困らせている。それが、せめてものなぐさめである。ともかく、ぼくたち現代の人間が、むかしの中国人にくらべたら、言葉による観察・描写に関する限り、はなはだしく退歩したことがわかればそれでいい。しかも、この退歩に拍車をかけるのが文部省だ。当用漢字などというもので、ぼくたちに、

「大声をあげて泣く」

と書くようになどと強制するのだから、言語道断、天道遮断、めちやくちやである。ぼくなど、こう書かされるたびに、恥ずかしくて顔があかくなる。とはいうものの『水滸伝』を読むまでは、ちっとも恥ずかしくなかったのだが、そんなことはどうでもいい。ともかく、今、現在のところは、恥ずかしくって、書こうとするたびに、手がしびれる。

おや、また話がそれはじめたようだ。なかなか本論に入れない。どうしたことであろう（実をいうと本論などないのだ）。

さてぼくら犬のごときものは、赤ん坊の時に、まずオギャーオギャーなきをする。こんな騒々しい動物はめつたにない。ことに哺乳動物では少ない。体の大きさに比較して、人間なみに赤ん坊が大きな声を出すのは、高い木の上に巣をつくる鳥の類ぐらいなものであろうか。ムボウビな赤ん坊が大きな声をあげるのは、ジャングル生活者にとつては、危険きわまりないことであるから、それも当然だろう。このオギャーなきは、赤ん坊が、完全に親に依存している離乳期ぐらいまでのあいだ残っているが、その間も少しずつ変形していく。だから、オギャーという声を聞けば、赤ん坊が生後どれくらいか、さほど苦労せずに見当がつけられる。ところで、赤ん坊のオギャーをも「なく」といって、言葉の上で区別しないのは、日本人で、他の国では、これを「なく」にいけない。おおまかというのか、心がひろいというのか、日本人は、鳥もなくだし、犬も牛もなくであるが、他の国では、言葉の上で二つは区別されているのが普通であ

11	受験番号
中	

国語 その四（六枚のうち）

る。日本では、生まれたばかりのオギヤーだけが「うぶ声」という言葉で、わずかに特別あつかいされる。オギヤーなきは、区別されるのが当然で、本質的には「なき」とは呼べない。悲しいという感情がともなっていないからだ。それは、腹がへった、のどがかわいた、痛いところがある、不快なところがある、といったことを大人に伝えるための信号にすぎない。もちろん、オギヤーなきは、涙ぬきである。

赤ん坊から、子供に成長し、自立への道を歩みはじめるころから、ぼくたち犬のごときものは、ほんとうになきはじめる。つまり涙の出るなきをはじめ。このなきを他の動物がするかどうか、それがしばしば問題にされてきたのである。そして、その頃から、オギヤーはウエーンに発声が変わる。他の大人と競争的な位置に立たされるが、まわりの攻撃性をまともに受けてはたまらない。そこで、攻撃性を一時的におさえる。その役割が、微笑と「なき」に与えられるというわけだ。微笑は攻撃性をおさえる先兵であり、それでだめだとわかると「なき」が第二陣として登場する。加えられはじめた攻撃を中止させるためだ。じゃれつく子犬をあしらっているうちに、ぼくたちは意に反して、あしをふんづけてしまったりする。すると、子犬はキャンキャンとなく。それにあたるのが、ぼくら犬のごときものの、ウエーンウエーンである。だが、ここで涙というものが、登場する。そしてこの涙こそが、くせものなのだ。声は信号で他者にむけられているが、涙もまた、視覚的な信号なのであるか。いや、そうではない。涙は自分に向けられているのだ。涙こそは、ぼくたちの感情を鎮静させる作用を持つものなのである。涙は、涙を流させた苦痛をやわらげ、静め、さらにそれを快感にさえ変化させるのである。そして、ぼくたちは涙が出ると、ある意味でほっとする。そこで、なきやむことができるのである。

声をともなったウエーンウエーンなきは、たしかに瞬間的には、大人の攻撃性をおさえさせる。それはたしかだ。しかし、それがながく続くと、シグナルにその効果を失う。そればかりか、逆にいらいらさせ、攻撃性をふたたびさそい出すことになる。

「うるせえな。いつまでウエーンウエーンないてるんだ」

そういわれ、頭をこづかれたり、あるいは、

「なきやまないと、おしりをぶつからね」

と、脅迫されると。こういう時の子供のなきは、涙ぬきの空なきというやつだ。それは、なきではなく、オギヤーオギヤーの要求なきにもどっているのである。だから、いつまでたっても、要求がみたされるまで、とまらない。いらいらした大人にこづかれ、涙をだせば、それでなきやむことができるのだ。

「なきねいり」という言葉があるが、これは涙の役割を実によく示している表現である。涙が鎮静的だからこそ、ぼくたちは、なかされるような危機的状況に置かれながら、ついには、そのまま眠りこんでしまふこともできるというわけだ。この涙の感情冷却作用は、意外と知られていない。

(注) *当用漢字……現在の常用漢字にあたる。戦後、政府が日常使用する漢字の範囲を定めたもの。

*『水滸伝』……中国・明代の長編小説。

11	受験番号
中	

国 語 その五（六枚のうち）

問一 「人間が進歩したなんて大うそだ」とあるが、なぜ「ぼく」はそう考えたのですか。

問二 「笑の字のつく熟語」とあるが、「笑」の字のつく漢字二字の熟語を三つ書きなさい。（ただし本文にある「微笑」はのぞく。）

--	--	--

問三 『笑い』と『なき』は、似たところをさがそうと思ってみると、非常に似ている」とあるが、「ぼく」が「似ている」としてあげているものうち、三つを答えなさい。

問四 「当用漢字などというもので、ぼくたちに、『大声をあげて泣く』と書くようになどと強制するのだから、言語道断、天道遮断、めちやくちやである」とあるが、「めちやくちやである」と「ぼく」が考えるのはなぜですか。

11	受験番号
中	

国語 その六（六枚のうち）

問五 「オギヤーはウエーンに発声が変わる」とあるが、「オギヤー（なき）」と「ウエーン（なき）」には、どのような違いがあると「ぼく」は考えていますか。

問六 「そしてこの涙こそが、くせものなのだ」とあるが、「涙こそが、くせもの」であるとはどういうことですか。「ぼく」の考えを説明しなさい。

問七 文中のカタカナを漢字に直しなさい。

	かんげつ		たいきゅう
	ムボウビ		しゅうせい
	シダイに		てんけいテキ
に			